台大日本語文研究

2006 年 6 月出版・第 11 期

目　錄

日本「近代的超克」的思想和戰時下台灣知識份子的諸相 ..... 張修愼　1

《源氏物語》裡秋的意象 ..... 陳明姿　39

考察分析多義語的各種理論
　　－以分析動詞「つける」的多義性為中心－ ..... 謝豐地正枝　55

《每日新聞》中所見 90 年代台灣報導的增減與架構 ..... 許均瑞　91

日語基礎句型與進階句型探索 ..... 趙順文　117

無住與兼好 ..... 曹景惠　161

日本「桃太郎」傳說故事的原像 ..... 葉漢鰲　187

台大日本語文研究第 11 期
2006 年 6 月，頁 1-38
本文 2006.4.30 收稿, 2006.6.28 通過刊登

日本「近代的超克」的思想和戰時下台灣知識份子的諸相

張修愼*

摘要

可以說「現代性」原先並不屬於東亞。台灣在認識「現代性」的時候，已經成爲日本的殖民地。

從 1910 年代開始，台灣知識份子以「六三法」的廢棄運動作爲開端，開始了一連串的運動。之後 1920 年代台灣共產黨的成立，可以證明是從「民族自決」轉換至「民族獨立」的鮮明事件。在民族運動的世界中，是從賴和開始，在 1920 年代開始活動的台灣青年，另外就是「文化協會」中活動的知識份子。甚至從 1930 年代開始，以民族運動爲舞台，在文學界活動的台灣青年和文化界人士也爲數眾多。到了 1930 年代後期開始，被稱爲所謂的「皇民作家」的知識份子，可以說就是面臨這些問題之下，在心中深深痛覺之下所產生的自覺反應吧！

目前爲止關於台灣「現代性」思考的研究，經常在文學或文化論的範圍內被論及，戰前以台灣思想史所論及的「現代性」幾乎是看不到的。本文是台灣知識份子研究的一環，其中從 1937 年台灣開始實施「皇民化運動」到 1945 年敗戰之前的戰爭時期，到底台灣知識份子是如何思考關於「現代性」的問題爲主要目的。1930 年代在宗主國的日本看到所謂「日本文化回歸」的現象，甚至到了 1940 年代在廣泛的知識份子群中，非常明顯出現了「超越現代」的思想。與日本「超越現代」的思想是屬於日本精神史的一環，連貫從 1930 年代開始的「日本文化的回歸」到 1940 年代「超越現代」思想本質的轉換中，日本所帶給台灣關於「現代性」的思想有如何的關係？換言之，進入戰爭時期

* 靜宜大學日本語文學系助理教授

在日本帝國「皇民化」的思維中，台灣知識份子是如何思考及面對？也是本稿要找尋的相關點。

關鍵詞：台湾知識份子、近代的超克、現代性、日本文化的回帰

The Thought Of Japanese [Overcoming Modernity] And The Various Aspects Of Wartime Taiwanese Intellectuals

CHANG Hsiu-shen *

Abstract

At first the「modernity」does not appertain to Eastern countries. Taiwan became a Japanese colony at the point of recognizing「modernity」.

Until now the research aspect of 「modernity」in Taiwan has always limited to the scope of literature and cultural dispute, while never touched on the thoughts of 「modernity」on pre-wartime intellectuals.

This paper is a part of research subject on Taiwanese intellectuals under Japanese control era, aimed at the thoughts of Taiwanese intellectuals on 「modernity」between the period of 1937 to 1945 the Japan's surrender. In addition, around 1930s, a trend of 「returning of Japanese culture」prevailed across the society of suzerain state Japan. Moreover, the idea of「overcoming modernity」appeared much plainly by 1940.

This paper intend to discuss the issue of relation between the thoughts of 「modernity」in wartime Taiwanese intellectuals brought forward by Japanese, the connection of idea of 「overcoming modernity」rose as one of subject of Japanese spiritual history and the process of convert 1930s 「returning of Japanese culture」to 1940s substantial idea of 「overcoming modernity.」

* Providence University Japanese Department Assist. Professor

Key words: Taiwanese intellectuals, overcoming modernity, modernity, returning of Japanese culture

日本の「近代の超克」思想と戦時下台湾知識人の諸相

張修愼*

要旨

「近代性」（modernity）というものは元々東洋に属すとは言えない。台湾が始めて「近代性」を認識した時点にはすでに日本領としての植民地になっていた。

1910年代から台湾知識人による「六三法」撤廃に関する行動が始まった。そして1920年代台湾共産党の成立は「民族自決」から「民族独立」への転換の証明となる出来事である。民族運動の世界でも頼和を始め、1920年代から活動した「台湾青年」の知識人達、あるいは「文化協会」において行動した青年達、さらに1930年代から民族運動の舞台としての文学界で行動した知識人や文化人は数多くみられる。1930年代の後半になると「皇民作家」と言われる知識人達も、まさにこうした問題状況を痛切に自覚していた知識人の自己選択である。

今まで台湾における「近代性」に関する研究は常に文学や文化論の範囲内の言説に限定されているが、戦前知識人思想史としての「近代性」についてはほとんど触れられてこなかった。本稿は、日治時代台湾知識人研究の一環であり、取り上げる時代は1937年から1945年の敗戦までの期間において、台湾知識人は「近代性」に対して如何なる考えを持っていたかを探るのが主な目的である。1930年代の宗主国日本では「日本文化への回帰」という社会現象が見られており、さらに1940年代に入ってから「近代超克」という思想がより明白に現れた。

* 静宜大学日本語文学科助理教授

このことと関連して日本知識人における「近代の超克」の思想が日本精神史の一課題として浮上し、1930年代の「日本文化への回帰」から40年代「近代の超克」思想の本質へと転換する過程で、日本からもたらされたこれらの思想が戦中期の台湾知識人における「近代性」思想と如何なる関係を持っているか。これが本稿の問題提起である。

キーワード：台湾知識人、近代の超克、近代性、日本文化への回帰

日本の「近代の超克」思想と戦時下台湾知識人の諸相

張修愼

一、はじめに

「近代性」（modernity）というものは元々東洋に属すとは言えない。台湾が始めて「近代性」を認識した時点にはすでに日本領としての植民地になっていた。

一般に「近代化」というものはヨーロッパ的なものと言われる。よく言われるように「東洋の近代はヨーロッパの強制の結果。あるいは、結果から導き出されたものである、ということは、一応は認めてかからねばならぬだろう」[1]。確かに明治以降、日本の「近代化」（文明化）は西欧化と同じものとして推進されたと言えよう。「近代化」について竹内好は以下のように提起している。つまり「抵抗を通じて、東洋は自己を近代化した。抵抗の歴史は近代化の歴史であり、抵抗をへない近代化の道はなかった。....抵抗がないのは、日本が東洋的でないことであり、同時に自己保持の欲求がない（自己がない）ことは、日本がヨーロッパ的でないことである。つまり日本は何物でもない」[2]。それ故、台湾は日本の植民地になってからもその「近代化」の試練の中に巻き込まれるようになった。その事実から考えても台湾における「近代性」に対する認識は日本により植民化された結果から生まれたものであると思われる。

今まで台湾の「近代」（modern）と言えば、まず頭に浮かんでくるのは清朝時代劉銘伝の工事実験である。その後も宣教師（George Mckay）により現代医学知識が台湾にもたらされた。台湾の「近代性」の発展はその時期においてはわずかに表面的な成果しか現れない。このような歴史の事実に現れるように台湾の本格的「近代性」は日本統治時代から始まった事が認識できる。

---

[1] 竹内好『日本とアジア』ちくま学術文庫　1995年6月25日第二版発行　p.12。
[2] 同上　p.17。

ほぼ 50 年間の日本統治であるが、最初の「民主国-1895」の成立（民族独立）は台湾知識人による「近代性」追求の結果でないこととは台湾学界の共通認識である。1910 年代から台湾知識人による「六三法」撤廃に関する行動が始まった。そして 1920 年代台湾共産党の成立は「民族自決」から「民族独立」への転換の証明となる出来事である。民族運動の世界でも頼和を始め、1920 年代から活動した「台湾青年」の知識人達、あるいは「文化協会」において行動した青年達、さらに 1930 年代から民族運動の舞台としての文学界で行動した知識人や文化人は数多くみられる。「皇民作家」と言われる知識人達も、まさにこうした問題状況を痛切に自覚していた知識人の自己選択である。

今まで台湾における「近代性」に関する研究は常に文学や文化論の範囲内の言説に限定されているが、戦前知識人思想史としての「近代性」についてはほとんど触れられてこなかった[3]。本稿は、日治時代台湾知識人研究の一環であり、取り上げる時代は 1920 年から 1945 年の敗戦までの期間において、台湾知識人は「近代性」に対して如何なる考えを持っていたかを探るのが主な目的である。1930 年代の宗主国日本では「日本文化への回帰」という社会現象が見られており、さらに 1940 年代に入ってから「近代超克」という思想がより明白に現れた。

このことと関連して日本知識人における「近代の超克」の思想が日本精神史の一課題として浮上し、1930 年代の「日本文化への回帰」から 40 年代「近代の超克」思想の本質へと転換する過程で、日本からもたらされたこれらの思想が戦中期の台湾知識人における「近代性」思想と如何なる関係を持っているか。これが本稿の問題提起である。

これは、言いかえると、日本が 1940 年代から現れた「近代の超克」という思想の中に含まれた「近代」と「反近代」の意味がある。従って、台湾で現れた「近代性」は日本から持たされたことも事実で

[3] 陳芳明『殖民地摩登』麦田出版　2004 年を参照。

ある。その論理性から考えると、本文ではまず戦時下台湾知識人の諸相を見て、二つ文化体系の中に似たものを対照して検討する。

二、「近代性」と民族性のジレンマ

「近代」（modern）あるいは「近代性」（modernity）は絶対的な意味を持たない。むしろ、それは「伝統」と相対的な概念であると考えられる。20 世紀で最も大きい動きの一つはやはり世界的な文化と社会の変動である。その変動に含まれる地域はヨーロッパだけではなく、アフリカやアジアも含まれる。よく言われる「東洋の近代はヨーロッパの強制の結果である」というの言葉から考えれば、やはり日本「近代化」の基点は鎖国以後の明治維新から始まったとするのが妥当だろう。そして台湾は 1895 年以後日本の植民地になったことによって「近代化」されたという事実は誰も否認できない。

「近代性」の問題は植民地された社会に於ける大きな課題である。当然、それは台湾知識人にとっても例外ではない。1895 年日本の植民地になってから、台湾社会は元来の農村経済を中心とした社会から資本主義社会に移行していく。その移行する過程において直面するのはやはり「近代化」である。

台湾は 1895 年に日清戦争の結果、日本に割譲されてから以後 50 年間の日本統治を受けた。日本の統治方針は台湾住民に対する「同化政策」であったというのが現在の研究者の共通認識である[4]。「同化政策」の内容を見るとまず最初に「国語」教育が実施された。言語は文明を作り出す媒介であると同時に文化の表現であるとも言われる。帝国と民族に関する「正統的」議論として帝国は中心民族の文化を周辺民族に対して認識させ同化させようとする。それは「近代」（文明）の名において自己の支配を正当化しようとする擬態である。

---

[4] 植民地台湾の「同化」に関する他の研究は以下のものを参照のこと。
駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店　1996 年、小熊英二『（日本人）の境界』新曜社　1998 年、陳培豊『「同化」の同床異夢　日本統治下台湾の国語政策』三元社　2001 年 2 月 25 日。

ところが、帝国の民族政策の基本が同化であったため、台湾の「近代化」への方向もまた近代日本の植民地統治による同化政策を基礎として決定され、近代を深く追求しようとするとすればするほど、植民地統治の政策を追認するというジレンマに追い込まれる。

そのために、帝国の民族政策は同化主義をとるのだが、同化政策に反対する事がはたして「進歩的」＝「開放的」であると言えるのかという問題が残る。植民地時代における台湾知識人「意識」の変革は、「近代性」への抵抗と同化の双方の過程にあると言える。しかし、すでに見たようにその「近代性」というものは日本の統治によって伝えられた事実から考えれば、「同化」への抵抗は日本と台湾人の運命を托生するものでもあったと換言できる。

およそ 50 年間の抵抗と同化というこの自己矛盾で逆説的な過程は、1910 年代から現れた台湾知識人の思想と行動を複雑微妙な形で規定した。知識人たちは同化と自治、独立と抵抗などの二律背反のいずれかを選択しつつ、1945 年に終戦を迎えた。しかし、抵抗するにせよ同化するにせよ、殖民時代が遺産として残した「近代性」に対して非常に高い関心を寄せた。「近代性」は戦前も戦後も例外なく知識人たちを規定する。要するに植民時代の台湾知識人は自民族に後進性を自覚してそれに「近代性」をもって対応し、自分達の進路を決めようとした。

植民地時代の知識人達の「近代性」への関心は二重である。一つは知識人たちの桃源郷のイメージとしての「近代性」、もう一つは帝国日本に同化せざるをえないことから来る「近代性」への関心である。前者をとって後者を棄てるときに、台湾民族主義が出てくるし、後者をとって前者を棄てるとき、「皇民化」される危険が出てくる。しかしこの二重性を認識する事により台湾知識人における「近代性」への関心を理解することが出来る。

およそ、今までの台湾研究を概観すると、特に 1920 年代以後の台湾を考慮に入れると日本の「近代性」によって持たされた問題は「民族」と「同化」そのものである。日本について言えば「日本」と「抗

日」が対立的な文化の関係として現れるということである。諸要素の中で無視できないのは、日本文化それ自体へ向けられたものとしても考えることが出去るだろう。台湾は 50 年間の植民統治の影響で避けられない「同化」の痕跡が存在している。それは戦前から戦後に至るまでいろいろな形の症候として見ることが出来る。台湾のほとんどの知識人における「近代性」は 1920 年代留学生数が多くなったという事情からも確認できるだろう。台湾に発生した一連の民族運動が「近代性」の発露と言えるが、それを 1930 年代になってからの文学等の描写においても見る事ができる。

つまり、宗主国への留学と共に「近代化」思想もまた台湾にもたされた。この思想は、それまでの伝統文化自体への反省をほどこし、知識人の精神史の部分として機能したとも考えられる。さらに、学問としての台湾思想史にいやおうなく含まれる「近代性」は、「日本」と「反日本」の自ら矛盾的な文化関係として表明されたと考えることができる。要するに、知識人が「近代化」される過程において、反日本的な思想もまた開眼し成育されたのである。

さらに、1930 年代の日本精神史において日本文化人に現れた「日本文化への回帰」の類型は 1937 年以後台湾文学で表現された「無意識」である「郷土性」の伝統的な部分と重なっている。というのは、日本の江戸時代からの国学には伝統的な儒教と影響とその読みかえがあるにもかかわらず、その後の明治維新が日本の「近代化」を促したという事実は、「近代性」追求の中で、国学と儒教といった「伝統的事象」の取捨選択が迫られたということを意味する。当時の世界列強の覇権を認識していた開明な知識人達により日本に「近代化」が導入されたのである。

三、戦時下台湾知識人における「近代性」思想

筆者は、台湾知識人における「近代性」への関心のあり方を、知識人の動向および時代によって三段階に区分している。すなわち、第一段階は 1920 年『台湾青年』を創刊してから 1927 年まで「文化

協会」が分裂した時期に当たる。第二段階は 1928 年謝雪紅が上海で「台湾共産党」を成立してから 1937 年の日中戦争に入るまでの時期である。第三階段は 1937 年の戦争時期から敗戦の 1945 年までである。

前述のとおり 1920 年代に東京留学した台湾青年であった蔡培火や蔡恵如を中心に、台湾社会の改革、文化の向上を宗旨とした台湾知識人の言論機関誌『台湾青年』が彼らの手で発刊された。ほぼ同じ時期、植民地「同化」政策による日本文化の要求並びに台湾文化の抑圧に抵抗するために、当時中部の士紳林献堂を代表にして設立されたのが「台湾文化協会」である[5]。知識人の行動から台湾知識人における「近代化」への関心は筆者の三段階の区別に当てはまるものとしてこの時期の言説をよく観察することができるが、台湾における「近代化」への進み方に対する選択権は、台湾側にはなかったと言っても良いだろう。

一般に、知識人における「近代性」に対する認識は 1927 年台湾文化協会の分裂までの一連の活動に見ることが出来る。1920 年代前期から 1931 年台湾共産党の解散までのほぼ 10 年間は台湾左翼主義の盛んな時期であったと考えても良いだろう。その中で、注目されるのは 1928 年に成立した台湾共産党大綱による「台湾独立」や「台湾革命」など鮮明な言葉で現れた「近代性」思想である。したがって、その時期は左翼運動が組織化され、知識人の民族意識も組織的に統一され、鮮明化された。もちろん、このような情勢は日本国内とも深く関係しており、早期の台湾留学生が宗主国の日本で体験した社会主義思想を台湾に持ち帰って実践したという事実に見られる。

史実に即して言うならば、1927 年以後の台湾文化界は、台湾文化協会の組織分裂による影響を受けることとなり、同時に、中国における国民党と共産党との対立、分裂を契機とし、それまで中国に傾倒していた台湾知識人が台湾に戻った。1920 年代後半に不合理な植民統治に対する民族運動が強まる中、文学界で活躍した台湾知識人

[5] 1921 年 10 月 17 日に台北大稲呈静修女学校において成立大会が開催された。

たちが、1930年代に入ってから、より大きな影響力を発揮するようになった。まず1930年代後期の文学作品の中で最も持ち上げられた「新聞配達夫」[6]と「牛車」[7]と「パパイヤのある街」[8]の三作を題材にして見てみよう。今までの先行研究においては三作はよく知識人の意識を反映すると考えられてきたが、実際には宗主国日本国内の社会情勢と共に変化しつつある事が分かる。

1934年『文学評論』に掲載された「新聞配達夫」は当時の台湾「近代化」の過程で、製糖会社に土地を強奪され、一家離散して東京に出稼ぎにいった少年の様子を描いている。小説の舞台は日本と台湾の二カ所に分かれて進行しているが、主人公である「私」の配達所の反抗と闘争が描かれており、「近代化」された台湾で受けた経済的搾取の描写もある。

「新聞配達夫」の中に、作家は台湾と日本における抑圧された人々の姿を非常に明晰な口調で対照的に読者の前に提出している。作家は抑圧された民衆の怒りを単に個人的なものに止まらず、民族を超えたグローバルな視点から、1920年代の世界共通の社会問題を引き出している。台湾に存在している社会問題は単に宗主国日本と被植民地の民族問題だけではなく、資本主義がもたらした社会問題も含んでいることを作家は示唆している。

さらに、呂赫若の「牛車」を見ると、女性に関する描写が意外によく目に付き、彼は男性作家としては繊細に、1930年代の台湾封建社会に残っている女性問題を批判している。作品の中に伝統的な封建社会や植民制度の犠牲となった女性がしばしば描かれている。このような文学手法は戦前台湾文学者の中でも異例であると考えられる。例えば、「牛車」以外に、彼が1930年代に書いた3篇の文学評論からも、彼の文学観と社会への意識を読みとることができる。つ

---

[6] 楊逵「新聞配達夫」、『文学評論』第1巻8号　1934年10月、河原功編『日本統治期台湾文学人作家作品集』第一巻「楊逵」、緑蔭書房　1999年収。
[7] Cf黄英哲編　『日本統治期台湾文学人作家作品集』第二巻　呂赫若「牛車」、緑蔭書房　1999年収。
[8] Cf下村作次郎編　『日本統治期台湾文学人作家作品集』第三巻、龍瑛宗「パパイヤのある街」緑蔭書房　1999年収。

まり、1930 年代の日本社会から現れた文学と対照して見るとそれらはほとんど類似した社会認識に基づいていたのではと思えるほどである。島内の詩人達が競って恋愛を歌い、感傷を語っている時、虚無的な雰囲気こそが詩境だという考え方が溢れている。

小説「牛車」には、日本の植民統治に対する批判は語り手の地の文の中に直接読み取ることはできないが、主人公の口を借りて会話の中に表現されている、現状に対する間接的な批判がしばしば見え隠れしている。それは、1930 年代の台湾社会に見られた、日本「南進工業化」政策の下での、「近代化」する過程で現れた島内に対する経済収奪への批判である。この物語は「近代化」による社会構造の変化がもたらした人間悲劇であると言っても良いだろう。小説の最後に現れた結末はやはり作家個人が「近代化」に対する疑問であろう。要するに、これは「近代化」が進む時、人間にもたらされるのは便利な生活であるが、しかし、必ずしも人間は幸せになれるとは限らないという疑問である。

1937 年 4 月、盧溝橋事件が発生する直前に発表された、龍瑛宗の短篇小説「パパイヤのある街」は日本の『改造』の第 9 回懸賞小説に佳作として選れた。小説の主題は 1930 年代の前半までの左翼作家の楊守愚、呂赫若などの作品とはかなり違う所がある。「パパイヤのある街」以前の台湾文学に登場する人物は、いつも暗い現実の中に立っているものの、将来について終始楽観的な性質を持っている人物が圧倒的に多かった。

ところが、龍瑛宗は「パパイヤのある街」の中で主人公陳有三のことを、悲観的な性格でかつ植民地統治に対しても全然抵抗意識が無い人物として描いている。この後、彼の小説の中には似たような敗北的な人物がしばしば登場する。これは、龍瑛宗文学の極めて大きな特色であり、このような人物の登場は、社会主義が盛んであった 1930 年代においては異質な例であると考えられる。

作家達は当時の台湾社会の農民、土地及び統治者の因果関係を極めて写実的な手法で描いている。しかし、統治者の強圧政策に対す

る主人公による抵抗の描写はほとんど目に付かない。本来、台湾における新文学は新文化運動の一環として、社会運動の全体と不可分な関係にあったと言える。ところが、1920年代までに台湾左翼勢力の存在は日本本土の幾多の弾圧によって不可能になった。

そのような社会の動きの中に、1937年の「パパイヤのある街」を前期の文学作品と比べると、「抵抗意識」の表れがしだいに希薄化したと考えられる。実際当時の台湾知識人は、主人公陳有三のように、資本社会の不公平に対してただ傍観するだけにすぎなかった。作家は非常に自然主義的な手法で「近代化」された社会に生きているがゆえに発生する人間の功利性を描いている。

作家は主人公の視線を通して、その街の一角を内地人がいる風景と本島人が住んでいる環境を二極的に表現した描写として提示している。本作品には、風景に対する内地人と本島人の環境の二極性と人物の対立性が圧倒的に目立っている。知識人を主人公として登場させるのは、龍瑛宗文学の特徴である。事実上の「皇民化時代」に入ってから1940年代までの龍瑛宗の文学には、「皇民」になった人物に関する描写は一つも見当たらない。小説の主人公は始終改姓名していない台湾青年である。沈黙は作家における唯一の武器かも知れない。つまり、30年代の左翼思想とその文学への単純な反映が盛んな時代における、この自然主義的に「忠実な」描写は、作家の植民体制に対する一つの抗議とみなすこともできるだろう。

勿論、主人公の自己の文化に対する批判的な態度は、文化進歩のための一つの不可欠な要素と考えられる。しかし台湾の場合、近代文明の道を進むことは自分の力で文化を推進することではなく、むしろ、宗主国日本の統治によって近代化されていくことを意味したのである。小説の中に現れた暗黒の部分は、ほとんどの先行研究においては、作家龍瑛宗の性格による表現として説明されたが、それと似たような描写は1930年代後半から1940年代にかけての台湾文学作品に頻繁に見受けられる。したがって、これらの暗黒の部分の表現は植民地化された台湾のインテリ階級が、自分の旧文化に対し

て疑問を問いながらも、異文化と接触する途中で遭遇した心理的な葛藤を端的に文学作品に残した結果とみた方がよいだろう。

小説の文脈に表れた因襲への批判は、1930 年代後半に植民化された一人の台湾知識人の無気力な呻吟にすぎない。たしかに台湾は日本の統治によって進歩し、近代化された。しかし、台湾の知識人は、このような外在的な力を抜け出さない限り、日本と似たような進歩の様式を避ける事はできず、当然、日本の統治体制に対する抵抗も不可能となる。このような悩みが、1920 年代後半から普遍的に植民地台湾の知識人の心の中に存在していたと考えられる[9]。

1937 年以後の戦争時期に入ると、所謂「皇民化」[10]をどれだけなされたか、の疑問についても非常に難しい要素が含まれている。当時小林総督は 1939 年 5 月 19 日、「皇民化、工業化、南進基地化」の台湾統治三原則を掲げた。その時、小林総督から、地方官会議において「皇民化」に対して次のような発言があった。「皇民化」は小林総督が挙げた治台三原則の一つであり、ここでいう同化とは台湾に対して「皇国精神」を教化することである。つまり、その意味は「皇恩」を均しく浴することであり、植民された地域の人々の思想、文化、慣習など全てを日本化し、彼らを忠実に法律を守る日本人のように変えることである。特に、戦争に入ると「一視同仁」、「天皇の赤子」というスローガンを掲げた所謂「皇民化政策」が一層強力に進められていった。

ところで、「皇民化運動」の具体的な内容は一体どのようなものであろう。元来、近代日本における国民統合方式として、地方改良運動、民力涵養運動、教化総動員、勤倹奨励運動などがよく知られている。しかし、1930 年代後半からは、こうした従来の統合方式に代わって、新しい国民統合路線が現れてくる。台湾では「皇民化」に対する基準もかなり違ってくる。「良き日本人になる」ということは、

---

[9] 張修愼「植民地時代の台湾知識人研究-「民族意識」の変容をめぐって-」2002 年大阪大学博士論文。

[10] 「皇民化」政策とは被圧迫民族の文化の個性を剥奪して天皇制イデオロギーを日常生活にまで浸透させ、これによって被圧迫民族から内発的服従を引き出そとする政策といえよう。

単に本島人のみの問題ではなく、日本人全体の問題になる。「内地人必ずしも完成せられた日本人でない、と同様新附の民である本島人として未完成の人々の多いのは當然である」[11]と竹内清は語っている。実際、その「良き日本人になる」とはどのような意味を持つのであろうか。端的に言うなら、その「良き」という物差しは「日本人として死ぬ」かどうかによって決められる。特に、厳しい時局進行の中で、物質、人力など資源の確保を急務として、台湾人民が「皇軍の兵士」として日本国籍のもとに大東亜戦争に出かけることは、「皇民化」の成果であり、台湾総督府が最も望んでいたことであった。

このような植民政策の浸透と共に、1930年代中期から、台湾文学の中にも日本語で書かれた作品が増えてきた。その中に所謂「皇民化文学」も登場した。一般に「皇民化文学」と言えば、周金波の「志願兵」[12]と王昶雄の「奔流」[13]そして陳火泉の「道」[14]の3作がよく批判された。本稿ではこの3作の他にこれらの発表された時期から1945年まで、所謂「植民時代末期の文学作品」にあたる張文環の作品も一緒に考えて知識人の意識変化をみたい。

「志願兵」と「奔流」の二作を発表した時期から考えて、二つの作品の主人公の心理的彷徨に、「旅愁」に似た感傷的描写があるからこそこれまで、彼は「皇民化作家」と呼ばれ、これが批判を招いた原因の一つだったと考えられる。しかし、作家の出身から見ると、陳火泉以外2人とも日本留学によって「近代化」された知識階級である。つまり、同じような人物像を描いた周金波と王昶雄の二人は、現実にも類似した経験を持っている。それは、この1940年代の二人の台湾知識人は、日本留学を通して「近代的」な知識を受容する一

[11] 鷲巣敦哉『台湾保甲·皇民化読本』台湾総督府台湾警察協会発行　1941年 p.145。
[12] Cf周金波「志願兵」原文『文芸台湾』第2巻6号　河原功、中島利郎編『日本統治期台湾文学人作家作品集』第五巻「諸家合集」　緑蔭書房　1999年収。
[13] Cf王昶雄「奔流」原文『台湾文学』第3巻3号　河原功、中島利郎編『日本統治期台湾文学人作家作品集』第五巻「諸家合集」　緑蔭書房　1999年収。
[14] Cf陳火泉「道」原文『文芸台湾』第3巻3号　河原功、中島利郎編『日本統治期台湾文学人作家作品集』第五巻「諸家合集」　緑蔭書房　1999年収。

方、自分達の後進性に気がついたのだが、個人ではこれに対してなすすべのないという無力感を抱えているのである。

1940 年代の日本は、封建的慣習が残っていた台湾と比較すれば、単に皇民化を強いたというだけの国ではなく、台湾の知識人にとって一つの理想郷であったとも考えられる。主人公自身は日本にいる間に、必死に身分を隠し、偽名を使い、台湾人である事実も公表できなかった。作家は、極めて冷静な筆調で徐々に物語の進行とともに自分の心理的な変化を描いている。一見「皇民化文学」と分類される『奔流』は、実際には多くの問題を含んでいる。特に重要なのは、作家が主人公の「私」を通して二つの文化に対する疑問を提起している点であると筆者は思う。

当時の台湾人にとって、皇民化への道を歩むことによってどうして自分の出自を放棄しなければいけないのか、それが大きな疑問であった。当時の状況を考えると、それは日本文化と漢民族文化の対立であると考えられるだろう。筆者は『奔流』の内容を考える時、常に松本清張の小説『砂の器』を連想する。勿論、物語の内容も違うので、比較するのは難しいかも知れない。両者に共通するのは、人間は出世するために、どうしても自分の過去を棄てなければならないのかという問いである[15]。

『奔流』に提起されている文化の衝突は、戦時下に存在している民族の違いの問題だけでなく、むしろ、それは日本社会においても普遍的に存在している「差別意識」にかかわっている。ちなみに、その「差別意識」の存在は時代と関係なくあたかも日本民族の特性の如くにさえ見える。それは人間の根底に存在している本性の表れであると言えるだろう。

同じように皇民化を求める道の描写は、『志願兵』にも描かれている。主人公の張明貴の帰台の目的は「皇民錬成」や「生活改善運動」、「改姓名」、「志願兵制度」などによって「台湾はどんな風にかはつ

[15] 張修愼「植民地時代の台湾知識人研究-「民族意識」の変容をめぐって-」2002 年大阪大学博士論文。

たか」を確認することであった。もともと彼は「週に一度は図書館へ台湾の新聞を見に行った。皇民錬成とか生活改善問題とか新聞を賑はしていた」。小説の中に描かれた「日本人になるといふこと」は二人の作家に一致している信念だが、「方法論」についての相違がある。

では一体、「志願兵」と「徴兵制」は台湾人にとってどんな意味があったのだろう。1943年（昭和18年）12月1日の『台湾文芸』の中の「徴兵制をめぐって」という座談会で、周は次のような発言を残している。「私は「志願兵」という作品も、その同じ世代の中に二つの違った考え方ーその一つをひっくるめて云えば打算的な考え方であり、他の一つはもう理屈なしに、自分はもう日本人だと云う。この時代を代表する二人は結局どちらかが正しくその時代に生きてゆくかと云うのが、即ち「志願兵」のテーマだったのです。」[16]

近藤正巳の研究によると、本来、植民地に対しては（憲法第二〇条）「日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ従ヒ兵役ノ義務ヲ有ス」を適用しなかったが、太平洋戦争に入ると南進への軍事労働力の供給も急増した。そうすると、台湾にいる日本人と本島人の間に違いがあるということになり、民族差別が一層深刻になるのも想像出来たという[17]。こうしたことから考えると「徴兵制」と「志願兵」の意味もより明白となるであろう。このようなことから、周金波が言ったように「理屈なしに、自分はもう日本人だと云ふ」と思っている張明貴も高進六の志願に敗北感を感じるのである。

陳火泉の「道」は、内容から見れば以上の2作同様に同じく皇民化下の台湾人の心理を描いた小説である。「道」は、1943年7月発行の『文芸台湾』第6巻3号に掲載された長編小説である。主人公の「彼」は、台湾専売局の製脳試験所で働いている台湾人である。小説の「道」の内容も同じような不満の口調で、台湾人が皇民化していく過程での苦悩を書いている。実際、台湾人は1937年の「皇民

[16] 周金波「徴兵制をめぐって」『台湾文芸』1943年12月1日。
[17] 近藤正巳「異民族に対する軍事動員と皇民化政策－台湾の軍夫を中心として-」『台湾近現代史研究』台湾近現代史研究会編　緑蔭書房　1988年。

化運動」によって徹底的に純粋な日本人になることを要求された。台湾総督府は義務教育の実施と国語の普及から要求し、国家観念の養成、さらに、日常生活における尊皇敬神の意義徹底、日本式日常生活の実行、改姓名などの様々の手段によって「皇民化運動」を強化していった。しかし、日常生活では、物語の主人公が直面したように、新旧課長の送迎会の時、ある事が原因で同僚に殴られ、周りからの差別を感じ始めるといったことが生じる。

物語の背景となる時代から考えると、主人公は生まれながらずっと「日本人」である。作家自身も物語の主人公も、日本人として生まれ、受けた教育も完全な日本教育である。その心境は「志願兵」の中で主人公の張明貴が言ったように「僕は日本に生まれた。僕は日本の教育で大きくなった。だから、日本人にならなければ僕は生きたって仕様がないんだ。」という心情と同様である。

事実上台湾は日清戦争の敗北により日本の植民地になり、台湾人も日本人になってしまった。それ以来、全島への徹底した日本語教育の実施を通して、台湾人としてのアイデンティティも破壊された。さらに、台湾総督府編の 1940 年 8 月号の『台湾教育』の中の「国民精神総動員実施項目並びに徹底的万策」という文章からも解るように、皇国精神の浸透を徹底するために方策として、次の 4 点が掲げられた。それは１、尊皇の大義浸透２、敬神の本義徹底３、滅私奉公の精神振起４、国語愛護常用の徹底である。

しかしながら、台湾人が「日本人」として以上の 4 点を要求されたのは、「皇民化運動」期になってからのことではなく、領台後すでに始まっていたことである。そのために「道」の中の主人公の青楠も日本精神の影響を受け、日本歴史を熟読し、俳句の創作を好み、日本文化の理解については内地人に負けない自信を持っている。また、「皇民化運動」は、単なる「良き日本人となる」ことを意味するばかりではなく、更に言うならば、日本統治者は台湾人が「日本人として生きる」こと以上に「日本人として死ぬ」ことを意図したと言えるだろう。主人公が考えているのは、「皇民」になれるかどうか

は日本精神の有無によって決まるということである。例えば、日本人の血が流れていても日本精神を持たなければ「日本人」とは言えないというの彼の理論である。

それでは、「日本精神」とはいかなるものか。戦時下の「日本精神」に特別な意味があるかどうかを検討する必要があると思われる。その点を明らかにすることによって、「近代化」された所謂「皇民作家」の精神状態を内在的に把握することができると考えられるからである。

日本の歴史と対照して見れば「日本精神」の流行期は、「満州事変」以後の時期と考えて良いだろう。当時の日本国内事情から見ると、満州事件から上海事変、さらに「満州国」の建立、国際連盟からの脱退など様々な対外関係に対抗するのが「日本精神」の高揚であったことも想像できるだろう[18]。日本国家のかかえる「思想問題」は、すでに大正後半期から動き始め、それは言うまでもなく天皇制と深く関わっている。

その後にも様々な変動が見えるが、その中で最も注目すべきは、1932年8月に国民精神文化研究所が成立され、「日本精神」の研究と宣伝をに重点がおかれたことである。さらに、１９３２年斎藤内閣の下に内閣思想対策協議会が設置された。委員会では「思想対策ノ一ツトシテノ思想善導ノ万策ハ、積極的ニ日本精神ヲ闡明シ之ヲ普及徹底セシメ国民精神ノ作興ニ努ムルコトヲ以テ其ノ根幹ト為ス」[19]ことを決議した。それに基づいて、以来国内各地にも国民講習所が設置された。

そればかりでなく、民間の研究でも、例えば大川周明や安岡正篤の「日本精神」に関する研究はやはり満州事変の頃を起点としている。ほとんど1930年代から民間各種の雑誌も圧倒的に「日本精神」の特集を組んでいて、これは時代の風潮と言えるだろう。北河賢三は、当時主な文壇、論壇で論じられた思想から見ると、三つの流行が見られるといっている。まず「満州事変」を契機にして日本国内

[18] 鹿野正直·由井正臣編『近代日本の統合と抵抗』日本評論社　1982年。
[19] 『日本文化時報』日本文化協会　各号参照。

で高まりだした「日本精神論」である。第二は 1930 年代に浮かんできた、所謂「自由主義」とそれをめぐる論議および当時の文壇における文化現象である。そして、戦争が始まってから著るしくなった現象の一つは「日本文化」への回帰である[20]。

恐らく、1930 年代日本における「日本文化の回帰」から 1940 年代「近代の超克」への思想変換もその現象の表徴である。そこで次に、「日本精神」の思想的特質を見ていくと、上述の説明で分かるようにそれは「日本精神」の唱導だけではなく、「思想善導」としての役割が極めて高かったと考えられる。要するに、所謂「日本精神」の論者は「満州事変」を契機として当時国内の排外力と連合し、それらを統括する役割を果たしたのである。さらに、「日本精神」の中心意識は、日本における国体観念或いは国体意識と重なり合っている。

当時の日本主義イデオローグの一人、藤沢親雄の「日本を枢軸とする新しき世界秩序の建設」によると、当時の政治危機は元来が個人主義的な社会に固定した国家観の危機であり、それへの対抗として西洋では全体主義あるいは普遍主義が登場してきたのに対して、日本国内は元々天皇中心の精神的結合によって強い国になった。この路線を歩めば、日本民族は世界一優越の地位に到達するということである。そこで明白となるのは戦時下の「日本精神」は少なくとも「萬方無比」或いは「皇道精神」の意識を含んでいたということである[21]。

以上のような理論的特徴は、日本国内の左翼主義者と自由主義者とを対立させ、国勢を利用して日本主義の全体的な優越性を強調することにあり、その意味で「日本主義」は全体主義理論に含合されることとなる。そこでは個人よりも国家が一つの体制として強く強調されている。極端に言えば、「日本精神」を持つ日本主義は単に日

[20] 北河賢三「一九三〇年代の思潮と知識人」『近代日本の統合と抵抗』日本評論社　1982 年。
[21] 藤沢親雄「日本を枢軸とする新しき世界新秩序の建設」『国維』第 18 号　1933 年 11 月。

本らしさを強調する主義ではなく、ある種の極端な「絶対主義」と言えるだろう。最後には、その体制は圧倒的に特定の価値の絶対化となり、国家全体が特定部分のために存在するような状況になった。

しかし、以上のような「日本主義」と「日本精神」に関する言論の変動を植民化された知識人は把握しているのだろうか。むしろ当時の台湾知識人が直面していたのは日常生活に感じる「民族差別」という問題である。つまり、「日本人」として生まれ生きることを要求されていながら、日常生活では「本島人」として無視されているという事実である。その政治に現れている差別の現実は、知識人にとって極端に残酷であったと思われる。

「奔流」と「志願兵」そして「道」は同じ皇民化を主題として書かれた小説である。同時に、それは 1940 年代決戦下の台湾文学に描かれた台湾知識人の類型を表していると考えてもいいだろう。だが、現時点から 3 作を判断し、それが皇民文学であるかどうかを論じてもあまり意味がない。もしも、第二次世界大戦の結果が変われば、台湾の立場も変わっていたはずである。現在我々に必要なのはその当時の植民地統治や皇民文学の思考から抜け出して、台湾知識人の意識は如何に変化しうるかを中心に考えるべきだと思われる。

その後、日本は 1930 年代に入ると、満州事変（1931 年）と日中戦争（1937 年）の戦時下にあった。1940 年代に入っても 1941 年に真珠湾攻撃、そして対米宣戦布告と動き、戦争状態は 1945 年に大東亜戦争が終結するまで続いた。この 5 年間は日本、中国、台湾にとり歴史的にも大きな転換期であり、台湾知識人にも未曽有の衝撃を与えた。皇民化、工業化と南進の三大スローガンが掲げられた戦争体制下の台湾では、文化、とりわけその根本であるとされた書籍文化もそのような政治的役割を担うことになった。その結果、知識人の活動もより厳しく制限されるようになった。5 年間にわたる大東亜戦争は台湾知識人にも大きな影響を与えることとなった。

1940 年代になってからの台湾文学を見るとほとんどは「写実文学」に属する事が分かる。確かに、張文環の文学作品はそのほとん

どが台湾の風俗習慣や四季、農民の生活の描写に力を入れていることから「風俗作家」とも評されている。しかし、彼の作品はただ風俗的描写にとどまっているだろうか。しかも、1940 年代の決戦時期に一人の台湾知識人が故意に「皇民文学」の理念に反する描写を、作品に残している事実は何を物語るのか、これは非常に興味深い現象と言えるのではないだろうか。

この時期に張文環の作品を検討すると二つの主題が描かれていることが分かる。一つは父権社会に虐げられた女性に関する問題である、もう一つは台湾の農村で生活する農民。いずれにしても「戦争」とは全く関係のない主題である。しかし、1940 年代、戦争が進行し、社会全体が国民統合の枠組みの中に組み入れられる状況で、彼の「写実的」な手法で書かれた作品は如何にして統治側の検閲を通ったのであろうか。ここで代表作の中から「藝妲の家」、「論語と鶏」、「夜猿」、「閹鶏」の 4 作を分析すると知識人としての張文環の思想も分かるだろう[22]。

1941 年 5 月『台湾文学』に掲載された「藝妲の家」は、ひとりの藝妲采雲の半生を描いた小説である。小説の中で主人公の采雲は金権社会の犠牲者として描かれている。彼女は新しい教育を受けたために、時々封建的な弊習に対して強い不審感を持っている。主人公の采雲は台湾の伝統習慣に対して嫌悪感を持っているが、「現実にはどうにも出来ない」と、自分の一切は総て運命だから反抗も出来ないと考えている。

このような描写に対して張自身が次のように述べている。「私の書いてるものは堅義の女がこれに落ち込まないやうに、その社会的な欠陥を指摘するものであって、決して藝妲階級に同情してゐると思っては困る。」[23]つまり、張が関心を持っているのは、藝妲階級よりも藝妲を縛り付ける社会現象と悪い慣習である。恐らく、その社会の欠陥は、当時の台湾社会に存在していた養女制度と迷信である。

[22] 「藝妲の家」、「論語と鶏」、「夜猿」、「閹鶏」の 4 作は中島利郎編『日本統治期台湾文学人作家作品集』第四巻「張文環」　緑蔭書房　1999 年収。
[23] 張文環「私の文学する心」『台湾時報』第 285 号 1943 年 9 月 15 日。

その後、1941年発表した「論語と鶏」には作家が一人の少年源の眼を通して、村人の慣習と『論語』を教えている先生の行為を描いている。「お祭りが近づいてくると、月のない夜でも部落の青年たちは、松明の明かりで獅子舞ひの稽古をするので庭ぢゅうに勇しい空気があふれてゐた。」[24]というのは村人の信仰である。

物語の舞台は台湾の農村であり、すべての農民の価値観は所謂、書房教育とお祭りで左右される。作家は、少年源の目を通して『論語』を教える先生の情けない姿を描いている。主人公の源は先生の行為を見て、「幻滅の悲哀」を感じ、あわれな感じをいだいている。張文環は、書房の先生の情けない姿を描くと同時に、伝統的な書房教育の欠点も指摘している。作家は非常に諷刺的な手法で、論語と鶏の対立性を読者の前に表現している。恐らく、作者の経歴から考えると、書房に関する描写も彼の経験であったのだろう。

物語の内容は、台湾の風俗、習慣、四季によって村の人間関係や社会の生存秩序が形成されている。そしてこのような風景はいつも「家」を単位として展開している。小説の発表される年代から考えると、張の「皇民化運動」に対する直接的な批判はほとんどみることができない。

1942年の小説「閹鶏」までの張文環の小説を詳しく検討するといずれの作品も次の基本要素をそなえている。1、台湾風俗に関する描写が多く見られる。2、農村社会に存在している旧慣習がしばしば描かれている。3、女性に関する宿命的な描写も度々読み取ることができる。4、「家」を単位として、自分の土地に対する主人公の執着心に関する描写が多い。

彼の1940年代以後の作品には植民統治に対する批判がほとんど読みとれない。しかし、1940年代、台湾で「皇民化運動」が実施されている非常時に、彼が意図的にヒューマニズム理念と風俗的な手法によって台湾社会を描写しているのは、植民統治に対する一つの

[24] 「論語と鶏」原文『台湾文学』第1巻2号　1941年9月　中島利郎編『日本統治期台湾文学人作家作品集』第四巻「張文環」　緑蔭書房　1999年　p.16。

抗議を意味すると言えるだろう。今までの先行研究はある程度作家の心情を説明しているが、具体的な問題点が何処にあるかを完全に解明してはいないと思われる[25]。

なおかつ、歴史変動の中で幾つかの視点から検討しければならないと思う。すでに述べたように元来、近代日本における国民統合方式としては、地方改良運動、教化総動員など幾つかの路線があったことがよく知られている。しかし、1930 年代後半になると、こうした従来のものに代わって、新しい国民統合方式が現れてくる。それらの方式には以前のものとの類似性も感じるが、教化の内容を詳細に検討すると、実際は大きく異なる性格のものであったことが分かる。

最初は、1937 年 4 月 19 日、「日本精神ヲ昂揚シ・・・国民ニ嚮フトコロヲ知ラシメ」ることを目標とするいわゆる「国民教化運動方策」がまとめられる。これを受けて、台湾で実施されたのがいわゆる「皇民化運動」であろう。そして、1937 年 7 月の日中戦争が全面的に開始されると、「国家教化運動万策」に基づく国民統合施策の実行を国民支配のために急進させることになった[26]。同年 9 月に、「挙国一致、尽忠報国」というスローガンにより開始された国民精神総動員運動がまさにそれである。

運動の性格を見ると、「国民精神総動員ノ中核タル国体観念ノ明徴、日本精神ノ昂揚ヲ強調シ、之ヲ社会万般ノ上ニ具現セシメン」という面が強いと思われる。このような「国民総動員運動」には日中戦争の泥沼化と、それに伴う国民生活の悪化、悪性インフレへの懸念の高まりが関係していた。ちなみに、日本国内の政治、社会の不安定な要因に応じて、「国民総動員運動」の内容は変わっていく。1939 年 3 月以降の「国民精神総動員運動」の目標を見ると、「物資の活用、

[25] 柳書琴の研究によると知識人としての張文環は植民支配を直接批判していないが、小説では風俗的な手法を借りて台湾封建社会の旧慣習を批判しているという観点を加えているという。
[26] 「国民精神総動員第二回強調週間実施要綱」（昭和十二年公文雑纂）（昭和十三年公文雑纂）。

消費の節約、勤労の増進、貯蓄の実行」の4点を読むことができる[27]。

以上の目標を対照すると、小説の内容で描かれている「台湾農村生活」に関する描写は、戦時下台湾においてはひとつの「国策」であったことがわかる。台湾統治の早期には、文化の違いによる考え方の差がたびたび生活の中に見受けられ、日本でも台湾統治はかなり問題を抱えていた。1937年の「皇民化運動」の実施はその現象を解消するためのものと考えても良いだろう。特に日中戦争が始まると、元々台湾で実施した「同化」政策もかなり深刻な問題に直面している。理解できるのは、戦争に必要な人力や財力は台湾でも日本と同じく必要となされたからである。皇民化は完全に日本国体の臣民になる道に変化した。「皇民化運動」の内容には、「新聞の漢文欄の禁止、日本語の使用の推進、寺や廟の偶像の廃止、神社参拝の強制、台湾の慣習による儀式の禁止」等が規定されている。

1941年に台湾総督府内の台湾警察協会が出版した『台湾保甲・皇民讀本』における「皇民化」の内容は、隅から隅まで台湾人における古来の慣習を徹底的に改造することを強く要請している。とくに、その中の4点に挙げられているのは婦女賣買の他の悪例と養女制度、荒唐無稽筆會吉凶災、あるいは旧正月などの悪習だ。以上の項目は、張文環の小説に現れる、台湾封建弊習や養女制度などに対する批判意識とかなり一致している。もしも、1940年代の日本にとって戦争は一つ「近代性」を追求するために避けられない運命だったとすれば、「皇民化運動」の要旨も違和感がないと思われる。というのは、その中に含まれる封建的思想の排除という観念も「近代性」の原則にそくしていると説明できるからである。

つまり、ここまでの検討によって明らかになったのは作家が作品の中に表した批判と「皇民化運動」に表した台湾民俗に対する批判とがほぼ重なっているということである。その意味においては、張文環の民俗的手法は決して統治側の意図に逆らうものではない。「皇

[27] 翼賛運動史刊行会編「国民精神総動員新展開の基本方針」『翼賛国民運動史』1954年　、中西郷市『大正翼賛読本』　刀江書院　1940年11月。

民化運動」の役割は、植民政府の台湾島民に対する、一つの国民統合の手段とみても良いと思われる。同時に、「皇民運動」の実施は台湾人が中国との因縁をすっかり断って、「立派な」日本人となる一つの手段でもある。「皇民化」が成功したか否かを精神面から推しはかるのは、難しいと思われるが、少なくとも形ぐらいは備えたいとするのが統治側の態勢である。こうしたことから、言葉から服装、慣習まで徹底的な変容が要求されたのである。

さらに 1940 年代の文学思潮から考えると、関連する問題点を見ることが出来る。つまり、1937 年に戦時体制が強化されてから、日本国内でも内閣情報部の設置や国民精神総動員中央連盟結成など、文化統制のもとに文学芸術が戦争遂行の手段として利用された。そのなかで、日本的なものをめぐっての論議や報告文学の機運が高まる。例えば、文学者の従軍、それに伴う戦争文学の流行と出版物の検閲の強化、国策文学の氾濫や文芸銃後運動の浸透に伴って、開拓文学や生産文学などの「肩書文学」が盛行したこともよく知られている[28]。要するに、張文環文学に描かれている台湾農村社会の生産様式は、戦時下に日本政府が強調した「生産文学」の要旨と一致すると見受けられる。

ちなみに、1942 年には日本文学報告会創立、大東亜文学者大会開催と国体主義の呼号など大東亜共栄圏の理念への盲従は止まるところがなかった。一連の理念を追う日本文学界では「日本への回帰」という風が吹いている。つまり、元来インドや中国の影響で形成された日本の伝統文化が、近世以降外来文化である西洋文化との接触を深め、ことに近代日本においてその圧倒的な影響から伝統的文化軽視の度合いを強めてきたことへの反動である。その一方、天皇中心の国体観念を絶対化し、「戦時期」意識の浸透が進んでいく。天皇制国家を合理化する概念と大東亜共栄圏思想の展開などが民族的危機感を増幅させ、アジアの盟主意識に裏打ちされた「日本文化への

[28] 桜本富雄『文化人たちの大東亜戦争 PK 部隊が行く』青木書店　1995 年。

回帰」の心情が急速に高まったのである[29]。

1937年から台湾で実施された「皇民化運動」が知識人に一体どこまで影響を与えたか、本稿では紙数の関係もあり解明できた点は必ずしも多くないと思われるが、「皇民化運動」自体のとらえ方も錯綜していて、様々な見解を整理する余地がある。1920年代から「近代性」を日本の植民統治によって持たされたことはもちろんだが、宗主国の日本の社会変化として1940年代における台湾知識人にもかなり皇民化思想が浸透していた事は疑えない。ただし、張文環の文学が強調する民俗的手法をある種の「郷土文学」への回帰と捉えれば、その中に表現されている封建の弊習や伝統的な旧慣習に対する批判も、台湾知識人としての自覚の表れと言ってよいだろう。

四、「近代超克」思想について

「近代の超克」という言葉は、戦争中の日本の知識人を捉えた流行語の一つである。元々、「近代の超克」がひとつの標語として提起されたのは日本浪漫派の「文明開化」と「近代主義」に対する批判からありこれはこの前身の雑誌『コギト』の頃から始まった。しかし、一つのモットーとして、広く提起されるのはやはり戦時期になってからのことである。

元来、日本で明治維新以後に移入された「ヨーロッパ的なもの」に基づく「近代化」は1930年代になってから急速に変化が見えてきた。1933年日本が国際連盟を脱退してから、すでに明治以来の伝統的な外交政策との調和の仕組みを踏み越えて、自分なりに新しい外交政策を決定しないといけない情勢に直面することになった。結果として、1930年代から大幅に「日本的への回帰」という風潮も日本国内に影響を与えることになった。1934年戸坂潤が「ニッポン、イデオロギー」と言う論説を書いて、「ニッポン主義、東洋主義乃至アジア主義、その他々々と呼ばれるとりとめのない一つの感情のよう

[29] 北河賢三「一九三〇年代の思潮と知識人」『近代日本の統合と抵抗』日本評論社　1982年。

なものが、現在の日本の生活支配している」[30]と指摘したのはよく当時の雰囲気を説明している。それ故、全体的「日本への回帰」は「近代化」され過ぎた一つの極端な結果であるとも言える。

その後、日本国内の所謂「満州事変」、五·一五事件、そしてナチス政権の成立と国際連盟の脱退と続く日本情勢のなかで、「日本主義」への煽動が急速に高まった。したがって、日本国内での一連の「近代性」に対する疑念の中で、戦中特徴的な近代批判運動を表明したのはやはり日本浪漫派と京都学派の知識人たちであった。太平洋戦争に突入すると、さまざまなシンポジュウムが開かれた。その中の一つが三回にわたって雑誌『中央公論』に掲載された「世界史的立場と日本」、「東亜共栄圏の論理性と歴史性」、「総力戦の哲学」と題する一連のシンポジウムであり、1942 年雑誌『文学界』が連載した文化総合会議「近代の超克」はその中で最も代表的なものである。

座談会の参加者は当時日本で一流の知識人と言われた人達で、中でも京都学派を代表する鈴木成高、西谷啓治、下村寅太郎と、『文学界』同人を代表した河上徹太郎、小林秀雄、中村光夫及び「日本浪漫派」を代表した亀井勝一郎ら 13 人であった。座談会は参加者のそれぞれの分野から「近代性」に対する議論として行われた。議論内容からみると、つまり「西洋の「近代」が日本に明治の文明開化の力によって移されて、これが日本に対して如何なる功罪があったか」、この疑問が座談会で提起された問題である[31]。

座談会でなされたのは明治以来における西欧の「近代」に対しての疑問から始まり、次に日本民族の現代の可能性との追及である。その中に明治維新以来の西洋を対象として学習した日本も他者ではないとの議論が出てくる。実際は、明治以後の日本は西洋の影響によって「近代化」したこととは今日歴史家の共通認識である。すなわち、日本は明治維新以来の文明開化の過程において、すでに西洋

[30] 戸坂潤『日本イデオロギー論』岩波書店　1977 年 9 月 16 日第一版発行 p .132。
[31] 河上徹太郎　他　竹内好『近代の超克』富山房百科文庫　2002 年 7 月 27 日第八刷発行。

の精神と文化を吸収している。言い直せば、当時においては「近代化されたもの」と見られる現象はことごとく西洋から輸入したものであったことであり、日本人が「西洋」の中に「近代」しか見なかったとも否定できないだろう。

しかし、西洋の「近代」とは、一体どんなものであろうか。座談会の進行に伴ってざまざま分野の参加者から西洋の「近代」に対する概念が提出された。西洋的「近代」における思想、科学や人間性、あるいは歴史における進歩の概念など、種々な分野でそれなりの提案があるが、最初に共同の根源を指したのはルネサンスの意味の探求だと思われる[32]。というのはルネサンスから西洋的「近代」が始まったことは出席者の共通の意見であった。日本における「近代」の発端は明治維新以後の「近代」であり、日本の伝統との比較である。だから、日本の古典における「近代」の意味は、やはり古典における内なる日本自身の反省の一つに過ぎない。このような「近代の超克」論は、参加者のそれぞれの分野での発言と相まって、再び日本近代史における難問が表出する。

元々、古代から日本民族の構成員としての主体は「人倫においてあるところのもの、親に対する子になりきろうと努力」している主体であるとよく言われる。それは「人倫の道の実現に努めつつある自己」である。このような伝統で日本の「近代化」へ進んでいく過程でだんだんと日本的伝統が失われたことも事実である[33]。日本社会は西洋の圧力のもとでの「近代化」への過程を、明治よりスタートさせ、大正から昭和期にかけては西洋的教育制度が普及し、マルクス主義など思想上の問題など様々な経験を経ったのだが、日本の知識人層は1930年代になった時点で振り返って見て、日本における伝統的部分を失ったと気がついた。「近代の超克」思想の本質には、知識人がこの現象に対する反省は実に「近代性」に対する疑問が存在する。しかもそれは反省だけにとどまらず、やはり日本精神文化

[32] 同上。
[33] 酒井直樹『日本思想という問題』岩波書店　1999年12月6日第七刷。

史の中の最も肝要な部分を発見し、再生する試みへと向けられたのである。

しかし当時、不吉な印象を持たれた座談会「近代の超克」が今なお注目されるのはなぜだろうか。その理由として考えられるのは、「近代の超克」の内容が現在の私達に対しても過去と現在とを如何に結び合わせるかという大切な問題を提起しているという点である。いわく「日本の近代化」とか、「近代日本の世界史的位置」、「そのさまざまの命題はとにかく日本人自身が将来へ向かって生きていこうという意識をつくりに欠くことの出来ない現状認識の重要な項目が、「近代の超克」を理性的処理しない限り、知的探索の対象になりにくいという現状もある」[34]。

当時の京都学派の発言を再び概観した時に、よく批判されるのはそれが「軍事進出」を合理化するに過ぎないという点である。1942年1月12日に、日本開戦を挟んで、西田の弟子らによる「世界史の立場と日本」が『中央公論』に掲載された。「道義的生命力と、その大東亜共栄圏内における実現」が現実の課題」とされているそこでの認識の中に、日本軍の勝利の反響を読むことはたやすい[35]。その思想の根底には、日本の明治維新以来内在する日本文化の両面性、復古と維新、尊王と攘夷、国粋（国体）と個人との問題など、所謂東洋と西洋の二つの文化圏の中に存在している伝統と近代との両立関係もまた含まれている。それはただ単に1942年による座談会「近代の超克」に現れた思想ということだけではなく目前の戦争という行動を通じて日本文化を再び実現する時がきたのだと知識人たちにとらえられたということである。「近代の超克」という思想が後の「大東亜戦争」と結びついて象徴的な役目を果たしたという事実は部分的ではあれ否定できない。

座談会における「ヨーロッパの世界支配に基づく一元的世界像を批判し、国際社会を複数の世界によって構成される多元的な構造と

[34] 竹内好「近代の超克」『日本とアジア』　ちくま学芸文庫　1995年6月25日。
[35] 高坂正顕　他「世界史的立場と日本」(座談会)『中央公論』昭和17年新年号。

して把握しよう..」という論点は今読んでも十分意味があると思われる[36]。ただ、過度的な「地域的な特殊性」の強調は現在の視点からは批判されるだろう。京都学派で根本的な思想だった「種の理論」が意味を持つ点はここにあると思われる。従って、「近代の超克」において近代を超克をしようとする試みが強調されたにもかかわらず、みずからが設定した民族ナショナリズムの方に傾倒していったという皮肉な側面である。

つまり、京都学派、特に「種の理論」において提出されたような1930年代における日本国内で「日本文化の回帰」に潜んでいた新たな民族ナショナリズムの感情がある。京都学派の反民族主義哲学の妥当性が批判される理由もここにある。これは「近代の超克」の思想史の意味が「日本文化の回帰」であり、1930年代から1940年代にかけての日本国内での特殊な事情である点を考慮すべきであろう。

確かに、日本の近代の問題は宗教、科学、文化の他に世界や国家、個人の関係の問題も含んでいる。如何に日本民族の未来を考えて世界と調和するかは当時の知識人がかなり労力をさいて議論を尽くした問題である。「近代の超克」に混在している民族的主体なくして歴史形成はありえないという論点は誰も否認できないが、民族そのものについては、世界の歴史的文化創造の根源とみなすには不十分であるとし、「民族主義」は単なる「民族利己主義」に他ならないとの論説もよく見うけられる。

結局、その後の歴史的推移が証明するように、太平洋戦争時期に開かれた「近代の超克」における論議は、やはり軍国主義支配体制下の一つの「総力戦」に過ぎない。つまり、それはその中の有機的な一部分たる「思想戦」の一翼をなしつつ、その時まで近代的、民主主義的な思想体系や生活的変化やその絶滅を目的として行われた思想的闘争ないし活動であった。

---

[36] 河上徹太郎　他　竹内好『近代の超克』富山房百科文庫　2002年7月27日第八刷発行。

五、結論

台湾知識人における「近代性」思想についての以上の分析から明らかなように日本の植民地統治を受けたいくつかの段階でその思想のあり方は違ってくる。知識人における「近代性」の洗礼を受けた時の心情は受容と抵抗の二つの態度に分けられると考えられる。1920 年代の初期からの所謂「新しい知識人」は自らが宗主国日本で学んだ知識を積極的に活用し、台湾を改造しようと考えた。「近代性」への追求、「社会改造」を意図するこれらの台湾知識人たちは、伝統を尊重するか、それとも「近代化」を根拠として活動するかの岐路に立たされていた。その現象は 1920 年代から 1930 年代のいくつかの台湾での文学論争からも読み取れる。その後、日本の政局が厳しくなる過程において、日本国内の「戦翼体制」の実施と共に、台湾にも「皇民化運動」が実施され、台湾全体が完全に「日本化」される局面に直面した。

現在に至るまで、戦前台湾で実施された「皇民化運動」を中心とする研究はほとんどみることが出来ない。果たして、1937 年以後台湾で実施された「皇民化運動」が台湾知識人にどのぐらい影響を与えたかは今でも不明のままである。ただ、先行研究においては 1940 年代の文学作品に知識人としての「植民地人」が宗主国の日本文化に対する過剰な迎合が読み取られてきたにとどまる。

しかしながら、単に意識人の作品と行動への検討だけで台湾人全体が「皇民化」されたかどうかの結論を出すのも非常に難しいと思われる。当時の小林総督が１９３９年５月に行った「皇民化、工業化、南進基地化」の台湾統治三原則を掲げた時点での「皇民化」に対しての方針はあきらかである。つまり、前章に述べたように「抑々國體の本義を明徴にし…一視同仁の聖旨を奉體して…皇國精神の徹底を図り、普通教育を振興し言語風俗を匡勵し忠良なる帝國臣民たるの素地を培養し…」[37]との発言が明白に示している。この発言に

[37] 鷲巣敦哉『台湾保甲·皇民化読本』台湾総督府台湾警察協会発行　1941 年 p.168。

は、支配者の見方、支配者のイメージの中にある「皇民化された台湾」の姿が具体的に描かれている。「皇民化」は小林総督が挙げた治台三原則の一つであり、ここでいう同化とは台湾に対して「皇国精神」を教化することである。つまり、その意味は「皇恩」を均しく浴することであり、植民された地域の人々の思想、文化、慣習など全てを日本化し、彼らを忠実に法律を守る日本人のように変えることである。これらは一見厳しく台湾人に要求するものとみられるが実は台湾人民の思想、文化、慣習など日本化（同化）するというのも、1937 年になってからはじまった要求ではない。

戦時体制が強化されてから表現されたのは 1940 年代の文学思潮である。日本国内に於いても内閣情報部の設置や国民精神総動員中央連盟結成などの文化統制がある。日本国内で氾濫した国策文学や開拓文学や生産文学などの典型は 1940 年代の台湾文学作品にも読み取ることができる。また別の言葉で説明すれば、戦時中日本における「近代の超克」の本質は、日本帝国主義の東亜政策の一環として考えられていることも否認できない。

その思想の内面には世界政策を「日本民族意識」のもとに合理化するものという性格が強く含まれていた。言い換えれば、「近代の超克」座談会の本質はその段階での日本国民性（民族性）の創出という役割を果たしたこともよく理解できるだろう。1940 年代の文学思潮中の傾向である「日本文化の回帰」から「近代の超克」に潜んでいるものと台湾の「郷土文学」に現れた意識には相似点があると思われる。日本が明治維新以来「近代化」への過程で失った伝統への喪失感覚は 1940 年代の台湾文学にも見られる。その理由が、両国が同じ儒教圏の文化基盤を有することにある。

「「近代の超克」は事件としては過ぎ去っているが、思想としては過ぎ去っていない。」[38]と言われるように、「近代化」されてから台

[38] 竹内好の言説によると「近代の超克」は、「事件として過ぎ去っているが、思想としては過ぎ去っていない」と明言している。「思想としては過ぎ去っていない」とは、「それにまつわる記憶が生き残っていて、事あるごとの怨恨あるいは懐旧の情をよびおこすということである」。つまり、当時のことをふりか

湾に残された「近代の問題性の克服」もまた「思想として過ぎさって」おらず、さらに「前近代」と「ポスト近代」の二面の両義性もまだ真の意味で克服されていない。戦時中の所謂「大東亜共栄圏」の理念は戦争や経済の侵略という側面を除いても、文化「共生」の意味をいまだ含んでおり、その再検討を通じてのみ、恐らくわれわれはアジア全体での「近代の超克」の克服の臨界に到達できるだろう。

参考文献

竹内好（1995）『日本とアジア』ちくま学芸文庫

鷲巣敦哉（1941）『台湾保甲·皇民化読本』台湾総督府台湾警察協会発行

河上徹太郎他　竹内好（2002）『近代の超克』富山房百科文庫

高坂正顕　他（昭和 17 年新年号）「世界史的立場と日本」（座談会）『中央公論』

酒井直樹（1999）『日本思想という問題』岩波書店

戸坂潤（1977）『日本イデオロギー論』岩波書店

北河賢三（1982）「一九三〇年代の思潮と知識人」『近代日本の統合と抵抗』日本評論社

桜本富雄（1995）『文化人たちの大東亜戦争 PK 部隊が行く』青木書店

中西郷市（1940）『大正翼賛読本』刀江書院

中島利郎編（1999）『日本統治期台湾文学人作家作品集』第四巻「張文環」緑蔭書房

尾崎秀樹（1991）『近代文学の傷痕－旧植民地文学論』岩波書店

鹿野正直·由井正臣編（1982）『近代日本の統合と抵抗』日本評論社

陳火泉「道」原文『文芸台湾』第 3 巻 3 号　河原功、中島利郎編（1999）『日本統治期台湾文学人作家作品集』第五巻「諸家合集」　緑蔭書房

近藤正巳「異民族に対する軍事動員と皇民化政策－台湾の軍夫を中心として-」(1988)『台湾近現代史研究』台湾近現代史研究会編　緑

えるとき、日本の戦後の知識人は懐かしさと恨みという矛盾したコンプレックスの心情を持ち続けた。竹内好「近代の超克」『日本とアジア』ちくま文庫 1995 年 6 月 25 日。

蔭書房
張修愼（2002）「植民地時代の台湾知識人研究-「民族意識」の変容をめぐって-」大阪大学言語文化研究科博士論文
駒込武（1996）『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店
小熊英二（1998）『（日本人）の境界』新曜社
陳培豊（2001）『「同化」の同床異夢　日本統治下台湾の国語政策』三元社
陳芳明（2004）『殖民地摩登』麦田出版
金耀基（1997）『從傳統到現代』時報文化出版公司
廖炳惠主編（1995）『回顧現代文化想像』時報文化出版公司